

17	刈谷	刈谷市立朝日小学校	ハラダ キヨヒロ
名前	原田 聖裕		
分科会番号	11a	分科会名	保健体育 (体育)

研究題目

技能を身に付け、仲間と共に課題を解決する児童の育成
～ 6 年体育科「バレーボール」の実践を通して～

研究要項

1 児童の実態と主題設定の理由

本学級（男子 18 名、女子 14 名）の子どもたちは、学年が上がるにつれて「汗をかきたくない」「寒いから外へ行きたくない」などの理由から放課に室内で遊ぶ子が増加している。その上、放課後は YouTube を視聴したり、オンラインゲームをしたりと家の中で過ごす時間が増加しているため、運動に親しむ子が減少している。こうした実態から、子どもたちに運動技能を習得する喜びや、仲間と共に体を動かす楽しさを感じさせたいと考えた。

1 学期に実践をしたプレルボールの学習では、ボール操作が苦手な子に対して、得意な子がマグネットを操作しながら立ち位置の確認をしたり、ボールの打ちつけ方を手本として見せながら教えたりする姿が見られた。一方で、運動を得意としている子ばかりが活躍し、運動能力の高い子と低い子の二極化が顕著に表れていた。また、自己やチームの課題を見つけた際に、教師に明確な答えを求めたり、課題を解決することを簡単に諦めたりする姿も見られた。単元終了後のアンケート（資料 1）では、プレルボールの授業を約 9 割の子が「楽しかった」と答えた。しかしながら、「体育の授業は好きですか？」という問いに「どちらでもない」「どちらかといえば嫌い」と答えた児童は、「苦手な授業のときはどのように動けばいいのか分からない」「体を動かすことが得意ではないので、友達の役に立てない」ことを理由として挙げた。

資料 1 体育の授業の対するアンケート (6 年 3 組男子 18 名、女子 14 名)	
①プレルボールの授業は楽しかったですか？	はい… 30 名 いいえ… 2 名
②体育の授業は好きですか？	好き… 17 名 どちらかといえば好き… 6 名 どちらでもない… 7 名 嫌い… 0 名 どちらかといえば嫌い… 2 名

これらのことから、運動を苦手と感じている児童も運動を楽しく行う中で技能を身に付けたり、単元を通して、自己やチームの課題を見つけ、仲間と共に解決するための方法を考えたり、実行したりすることができるような教育活動を展開しようと考えた。

そこで本研究主題を「技能を身に付け、仲間と共に課題を解決する児童の育成」と設定し、6 年生のバレーボールの単元を通して研究を進めることにした。

2 研究の構想

(1) 目指す子ども像

技能を身に付け、仲間と共に課題を解決する児童

(2) 研究の仮説

【仮説 1】 練習方法を工夫することで、技能を身に付けることができるだろう。

【仮説 2】 課題練習や話し合いの場を設定し、教具を活用することで、仲間と共に課題を解決することができるだろう。

3 単元構造図とルール

以下のように単元構想とルールを設定し、実践を行った。ルール（次頁資料 2）について、子どもの実態に応じて適宜修正や変更を行うものとする。

「バレーボール」単元構想（8 時間完了）

時	学習内容と活動				
1	【オリエンテーション】バレーボールの特性や学習の流れを理解する。				
	10	20	30	40	45
	オリエンテーション	ゲーム①	ルールの工夫	ゲーム②	振り返り
2	【ねらい 1】バレーボールの楽しさを味わいながら、アンダーハンドの技能を身に付ける。				
	5	12	22	27	37
	めあての確認 ウォーミングアップ	パターン練習	ゲーム①	作戦タイム	ゲーム② 振り返り

5	【ねらい2】チームの課題を解決しながら、バレーボールをより楽しむ。					
6	5	1 2	2 2	2 7	3 7	4 5
7	めあての確認 ウォーミングアップ	課題練習	ゲーム①	作戦タイム	ゲーム②	振り返り (ルールの工夫)
8	【バレーボール大会】これまでに身に付けた技能を発揮し、チームで協力して優勝を目指す。					
	5	4 0				4 5
	めあての確認 ウォーミングアップ	バレーボール大会（トーナメント戦）				振り返り

資料2 朝日小バレーボールのルール

チーム	・男女混合の5～6人で構成する。 ・ゲームの人数は3人とする。	得点	・相手コートにバウンドしたときに1点入る。
コート	・ネットの高さは190cmとする。 ・縦13.4m × 横6.1m	反則	・チームがボールに4回以上触れる。 ・1人が続けて触れることは不可とする。
審判	・セルフジャッジ	返球	・3回以内に相手コートへボールを返す。
サーブ	・得点に関係なく、両チーム交代で行う。 ・チーム内で順番に行う。 ・届くところから下投げで行う。	勝敗	・前後半4分とし、得点の多いチームを勝ちとする。

4 研究の方法

(1) 仮説1に対する具体的な手だて

①練習方法の工夫

アンダーハンドパスの技能を用いたボール操作を身に付けることを目指し、単元前半でパターン練習（資料3）を設定する。授業の様子や学習ノートの振り返りを基に、教師が練習を選択する。ゲームの中のさまざまな状況を練習内容とし、個人やペアで行えるようにする。また、技能ポイントを記載した資料を拡大印刷し、壁面に掲示することで、いつでも確認しながら練習できるようにする。このように、練習方法を工夫することで、技能を身に付けることができるだろう。

(2) 仮説2に対する具体的な手だて

①課題練習の場の設定

単元後半では、自己やチームに応じた課題解決のために、課題練習の場を設定する。子どもたち自身が課題と向き合い、解決に近づく練習方法を考え、課題を意識して練習に臨めるようにする。その際に、より効果的な練習方法を考えることができるよう「課題練習シート」（資料4）を用いる。「課題練習シート」に示してある練習は、あくまでもチームで話し合う際の一助として扱うものとし、チームで考えた課題練習を認めるようにする。このように、課題練習の場を設定し、教具を活用することで、仲間と共に課題を解決することができるだろう。

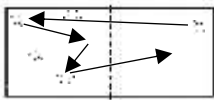
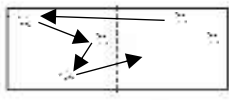
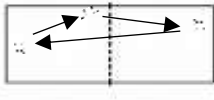
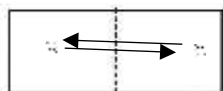
②話し合いの場の設定

単元の中で、チームごとに課題を話し合ったり、作戦の共有をしたりする場を設定する。ゲームの合間に作戦タイムの場を設け、ゲームの内容と活動を振り返るようにする。その際、タブレット端末で撮影をしたゲームの様子を視聴したり、よい動きができていた仲間やチームの改善点を記述できるようにした作戦ボードを活用したりしながら話し合うようにする。また、授業の終末には、「ゲームチェックシート」を基に学習を振り返り、自己や

資料3 パターン練習

パターン練習	技能ポイント
①直上レシーブ（個人） ・ボールを真上に上げ続ける。	・へその位置まで腕を下ろしてもよい。 ・肩の延長線上に腕があるときにボールを当てる。
②振り子（ペア） ・二人一組で向かい合い、左右交互に出されたボールをワンバウンドさせてから相手に返す。	・体を相手の方に向ける。 ・腕を振らずに、膝の屈伸を使ってボールを返すようにする。
③3種類のパス（ペア） ・二人一組で向かい合って行う。 1：真上に上げて、前に返す。 2：真上に上げて、横向きで返す。 3：真上に上げて、後ろ向きで返す。	・膝の屈伸を使って、ボールを真上に上げるようにする。 ・ボールの真正面に入り、肘を伸ばしてボールを受けるようにする。
④連続アンダーパス（ペア） ・ネットを挟んで向かい合い、ノーバウンドもしくはワンバウンドさせながら連続して打ち合う。	・膝の上下動でボールをコントロールする。 ・膝や腰といった下半身の力を使い、全身でボールを送り出す。

資料4 課題練習シート

【サーブからのレシーブ練習】  ・サーブからレシーブを行う。 ・3回つないでボールを相手コートに返すようにする。	【ボールつなぎ練習 3回 Ver】  ・サーブからレシーブを行う。 ・ボールをつなぐときは、ワンバウンドさせてもよい。
【ボールつなぎ練習 2回 Ver】  ・サーブからレシーブを行う。 ・ボールをつなぐときは、ワンバウンドさせてもよい。	【アンダーハンドパス練習】  ・サーブからレシーブを行う。 ・相手からのボールをワンバウンドさせずに返すようにする。

チームの課題を可視化しながら、より具体的な解決方法を考えるようにする。このように、話し合いの場を設定し、教具を活用することで、仲間と共に課題を解決することができるだろう。

(3) 抽出児童Aの実態と願い、仮説の検証方法

本研究の手だての有効性を検証するために抽出児童を設定し、児童Aの変容を追うことにする。単元前のアンケートでは、「球技は苦手だけど、みんなで協力してスポーツをするのが楽しい」、体育の授業は「どちらかといえば好き」と答えた。しかし、1学期に行ったブレイボールでは、相手の取りにくい場所にアタックをするために繰り返し練習をしたり、学習資料を見たりしていたが、技能のポイントをしっかりと理解できずに、技能を高めることができなかった。また、チームメイトの意見を聞くことはできるが、内気な性格のため、自分の考えを伝えられず、仲間と共に関わりながら課題を解決する姿は見られなかった。これらのことから、今回のブレイボールの単元では、練習方法を工夫することを通して、技能を身に付けてほしいと願う。また、課題練習や話し合いの場を通して、自分の考えを発信するとともに、仲間と話し合いながら、課題を解決してもらいたい。

仮説を検証するために、パターン練習や課題練習、話し合いやゲームの様子（行動観察・タブレット記録・ヒアリング調査など）と学習ノートの記述内容から子どもたちの変容を分析する。

5 実践と考察

(1) 「ブレイボールの難しさを知る児童A」

第1時のオリエンテーションでは、単元の進め方やゲームのルールを確認し、ゲーム①を行った。子どもたちは、狙った方向にレシーブをすることができなかったり、仲間とボールをつなげようとしても二人目や三人目でミスをしたりする場面が多く、困っている様子が見られた。ゲーム①を終えた後にルールについて話し合う時間を設けた。子どもたちにゲームをやってみてどうだったか聞いてみると、「ボールが繋がらない」「相手コートに返せない」といったボール操作の難しさを感じていた。そこで、新たなルール（資料5）を付け加えることにした。その後、新たにルールを加えて行ったゲーム②では、苦手としている子がボールに触れる回数は増えたものの、依然として、ボールを思うように操作できない子が多かった。児童Aは、仲間から遠い場所でボールを受けようとしていたが、ボールは来ず、どのようにパスを受ければよいか分からない様子だった。児童Aはこの日の振り返り（資料6）に、「しっかりとまっすぐ飛ばせるようにしたい」と記述をし、ボール操作の技能を身に付けたいという思いがうかがえた。

資料5 新たに加えたルール

サーブ	・相手サーブは、ワンバウンドをさせてよい。
返球	・ボールをつなぐ際に、ワンバウンドならしてもよい。
得点	・3人でつないだボールを相手コートに落としたり3点が入る。

資料6 第1時の児童Aの振り返り

思っていた以上に難しく、味方からのボールを打ったら変な方向に飛んでしまったので、しっかりとまっすぐ飛ばせるようにしたいです。

(2) 「パターン練習でボール操作の技能を身に付けようとしている児童A」

第1時の振り返りを見ると、「腕のどこでボールを打てばいいのかわからない」などのボール操作についてのことが多く見られた。そこで、第2時から、「パターン練習」を設定し、ボール操作の技能を身に付け、ブレイボールの楽しさを味わえるように授業を展開していくこととした。パターン練習では、子どもたちの振り返りから、狙った方向にボールを打てるようにすることをねらいとして「直上レシーブ」を選択して行った。児童Aは、「直上レシーブ」でボールを真上に上げることができなかった。そこで教師が、掲示してある技能ポイントを確認するように声を掛けた。ボールを真上に上げるためには、「へその位置まで腕を下ろす」「肩の延長線上に腕があるときに当てる」ことが必要であると確認をした。その後、技能ポイントを意識して練習に取り組んだことで、児童Aの動きが改善された。「直上レシーブ」が個人技能を高めることに有効であったので、第3時から、ウォーミングアップに取り入れ、継続的に行っていくこととした。ゲームでは、児童Aはボール保持者の近くでパスを受け、「直上レシーブ」の成果が発揮できており、技能の高まりが見られた。しかし、真上にボールを上げることはできなかったものの、仲間のところにパスをすることや、相手コートまでボールを飛ばすことはできなかった。児童Aの振り返り（資料7）には「真上にパスがいったしまった」と記述されており、パターン練習の「直上レシーブ」に取り組んだことで、ボールを真上に上げる技能は身に付いてきたが、「味方のところにパスができるようにしたい」「相手コートに……やりたい」という記述から、ボールを狙ったところや相手コートに飛ばせるようにすることを課題にしていることがうかがえた。

資料7 第2時の児童Aの振り返り

真上にパスがいったしまったので、味方のところにパスができるようにしたいです。相手コートに入れようとしても、なかなか入らないので、ゲームの前の練習で意識してやりたいです。

そこで、第3時のパターン練習では、「振り子」と「連続アンダーパス」の2種類を選択して授業を展開していくこととした。はじめ児童Aは、壁面の掲示を見て、「振り子」と「連続アンダーパス」の技能ポイントを確認した。ボールを狙ったところへ返すことや相手コートに飛ばすことに難しさを感じては

いたものの、練習を重ねるごとに、膝の屈伸を使って、ボール操作をしている姿が見られた。その後のゲームでは、児童Aの動きに変化が見られた。資料8は、ゲームに取り組む児童Aの動きを第2時と比較したものである。第2時のときと比べ、パターン練習の「振り子」や「連続アンダーパス」に取り組んだことで、膝の屈伸を使っていることが分かる。また、第2時の「直上レシーブ」で身に付けた「へその位置まで腕を下ろす」という技能ポイントを意識していると捉えることができ、さらには、右足を半歩下げて、腰を低く構えるフォームを引き出すことができた。第2時には、ボールを狙ったところへ飛ばすことに苦戦していた児童Aだが、第3時では、仲間にパスをすることができた。児童Aの振り返り（資料9）の「アンダーハンド……できた」という記述や、仲間へのパスを成功させたゲームの様子（資料10）から、パターン練習の「振り子」と「連続アンダーパス」に取り組んだことで、狙ったところにパスをすることができ、練習の成果を実感したことが分かる。しかし、相手コートにボールを飛ばそうとしたときに、ボールは真上に飛んでしまった。児童Aの振り返り（資料9波線部）に「返そう……考えてやりたい」と記述しており、相手コートにボールを飛ばしたいという思いが感じられた。



そこで、第4時のパターン練習では、「3種類のパス」と「連続アンダーパス」の2種類を選択して授業を展開していくこととした。児童Aは、これまでと同様に、「3種類のパス」と「連続アンダーパス」の技能ポイントを確認している姿が見られた。児童Aは、「3種類のパス」を行っていたのだが、下半身の力を使おうとはしているものの、相手コートに飛ばすことができていなかった。そこで、教師がチームメイトの運動能力の高い児童Bに、アドバイスするように声を掛けた。資料11は、教師と児童Aと児童Bとの対話の一部である。児童Bは「腕の位置が……上手いくいかも」とアドバイスをしていた。児童Aは「下げていなかったかもしれない」と言い、自分ではできているつもりだったが、仲間からの客観的に見たアドバイスをもらったことで、自分の動きを確認することができた。次の「連続アンダーパス」の練習では、腕を下げて、下半身の力を使いながら全身でボールを送り出すことができた。児童Aの振り返り（資料12）に「打ちやすい……相手コートに返せた」と記述されていたことから、これまでに授業の様子や振り返りを基に練習方法を工夫したことで、ボール操作の技能を身に付けることができたと考えられる。また、「味方の位置……つなぎたい」という記述から、個人の技能が身に付いたことで、仲間と連携することについて思考を広げようとしている児童Aの姿がうかがえた。

資料9 第3時の児童Aの振り返り
アンダーハンドを使って、味方にパスすることができた。味方にパスすることはできたが、返そう（ボールを相手に）とすると、ぜったいに真上に飛んでしまうから、ちゃんと練習の時、どうしたら相手コートにうまく返せるのか、考えてやりたい。



資料11 児童Aとの対話メモ（第4時）
教師：BはAの動きを見てどう思った？
児童B：膝とか腰は下がっているけど、腕の位置が高いから飛ばないんだと思う。もう少し下げてみたら上手いくいかも。
教師：Aは腕のことを意識していた？
児童A：へその位置まで下けているつもりだったけど、下げていなかったかもしれない。
教師：じゃあ、もう少し時間あるから、腕のことも意識しながらやってみようか。

資料12 第4時の児童Aの振り返り
うまくいったところは、打ちやすいところにパスできたところと、味方からのパスを相手コートに返せたことです。だけど、味方の位置が分からなくて、一人で返してしまったことが多いので、みんなでボールをつなぎたいです。

第2時～第4時で児童の実態に応じた「パターン練習」を取り入れ、練習を行ったことで、児童Aは、アンダーハンドパスの技能を用いたボール操作を身に付けることができた。このことから、仮説1の手立て①は有効であったと言える。

（3）「自己やチームの課題を解決しようとしている児童A」

第5時から単元後半となり、課題練習や話し合いの場を設定し、教具を活用しながら、仲間と共に自己やチームの課題を解決できるように授業を展開していくこととした。はじめに、チームの課題を確認した後、「課題練習シート」を参考にしながら、練習方法の検討をした。児童Aのチームは、「1回で返してしまうから、3点が入らない」「みんながボールにさわっていない」という課題から、「サーブからのレシーブ練習」を選択した。ボールをつなぐのに、どうすればよいのか困っている様子が見られたが、児童Bが「この場所に来たら打つようにしよう」と声を掛けたことで、レシーブの範囲が明確となり、ボールが繋げるようになった。さらに、児童Cが「レシーブする人の名前を呼んでみよう」と声を掛けたことで、仲間とボールを譲り合うことが減った。仲間と共に声を掛け合いながら課題の解決に向けて練習する姿が見られた。ゲームでは、レシーブの範囲を決めたことで、ボールがつながるようになり

相手コートに返して得点する姿が見られた。チームの振り返り（資料13）には、「前よりも……減った」と記述されていたことから、課題練習や仲間からのアドバイスを受けたことで、チームの課題を解決していることが読み取れる。児童Aの振り返り（資料14）には、「ゲーム①では……返せてなかった」と記述しており、ボールをつないで相手コートに返す回数は増えているものの、継続的に行えていないことが分かった。また、「腕を下げることや……意識してやりたい」という記述から、単元前半の「パターン練習」で身に付けてきた技能ポイントを意識して取り組んでいることが分かる。

第6時、児童Aのチームは前時の作戦ボードに「レシーブの精度が悪い」ことを課題として挙げており、また、児童Aの振り返り（資料14 波線部）にも「味方にパス……いくことがある」と記述をしていた。そこで、課題練習では、「ボールつなぎ練習3回 Ver」を選択した。児童Aは、仲間の名前を呼んでパスをしたり、仲間からパスされたボールを落とさずにダイレクトで相手コートに返したりする姿が見られた。この日のゲームでは、体勢が悪い状態でも仲間にパスをするため、ミスが多く目立っていた。ゲームの合間の作戦タイムでは、タブレット端末で撮影をしたゲームの様子を視聴しながら話し合いを行った（資料15）。児童Bから「体勢が悪いのに味方につなごうとしている」という意見が出たことにより、全員がチームの課題に気付くことができた。さらに、「味方につなげるとき……返したりしよう」という意見や、児童Aの「味方にパスするときは、取りやすいようにしよう」という意見が挙がったことから、仲間と共に課題を解決する方法を考えている様子が見られた。その後の児童Aのチームは、レシーブを行いやすい体勢のときにはボールをつないだり、体勢が悪いときには、ダイレクトで返したりしながらゲームに臨み、勝利することができた。授業の終末には「ゲームチェックシート」を基に振り返った（資料16）。

「相手や味方が……構えることができた」「話し合いで……取り組むことができた」の項目にA（とてもよくできた）評価が付けられていた。さらに、チームの振り返り（資料17）には、「最初のゲームで……できるようになった」と記述されていた。これらのことから、ゲームの合間に作戦タイムの場を設けたことで、チームの課題を見つけ、仲間と共に解決することができたと考える。さらに、児童Aの振り返り（資料18）の「後半は場面……できました」「これからも……しないようにしたい」という2点の記述から、作戦タイムで立てた「無理をして味方にパスをしない」というチームの作戦を意識して取り組んでいたことが分かる。

第7時、児童Aのチームは前時の「ゲームチェックシート」（資料16 黄枠）を見て、B評価を付けた項目のアンダーハンドパスのボール操作を課題として挙げていた。そして、児童Bが「声を掛けることを忘れないようにしよう」と発言をしていた。そこで、チームのめあてを「みんなで声を掛けて味方が取りやすいパスをしよう」とした。課題練習では、チームで考えた「三人でボールつなぐ練習」を行った。児童Aは、名前を呼びながら、単元前半から学んできた技能ポイントを生かして、練習に取り組む姿が見られた。この日のゲームでは、「三人でボールをつなぐ練習」に取り組んだことで、仲間に取りやすいパスをして、相手コートの狙ったところにボールを打つ姿が見られた。作戦タイムでは、守備についての話し合いを行った。児童Aの「児童Eがダイレクトで返してくることが多いよ」という意見が挙がり、相手チームの攻撃パターンに気付くことができた。本単元の前には、内気な性格のため、自分の考えを伝えられなかった児童Aであったが、課題練習や話し合いの場を通して、自分の考えを発信するとともに、仲間と話し合いながら、課題を解決している姿が見られた。その後のゲームでは、相手の児童E以外のところにボールを返すことを意識して取り組んでいた。またこれまでの児童Aはボール保持者に近づきパスを受けていたが、チーム全体のアンダーハンドパスの

資料13 児童Aのチームの振り返り（第5時）

前よりもみんなでボールをつなげたし、2点を取れるようになってきた。あと、ボールにさわっていない人が減ったので、次の試合も続けたい。

資料14 第5時の児童Aの振り返り

ゲーム①では、たくさん3回で返せたけど、ゲーム②は、あまり返せてなかった。味方にパスを出すときに、たまに変なところに飛んでいくことがあるので、腕を下げることや、下半身を使うことを意識してやりたいです。

資料15 児童Aのチームの対話メモ（第6時）

児童B：体勢が悪いのに味方につなごうとしている。
児童C：自分たちのミスで相手の得点になっているね。

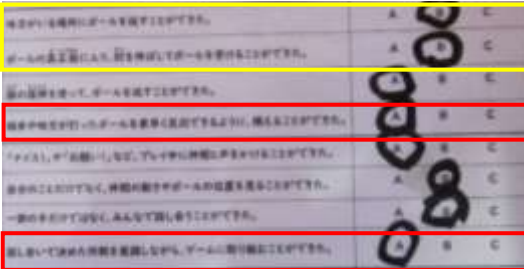
児童D：どうする？

児童B：味方につなげるときはつないで、無理そうなら2回で返したり、つながずにダイレクトで返したりしよう。

児童A：あと、味方にパスするときは、取りやすいようにしよう。

児童E：次の試合は勝ちたいね。

資料16 児童Aのチームのゲームチェックシート



資料17 児童Aのチームの振り返り（第6時）

最初のゲームで、できていなかったことが、みんなと話し合ったことで、2試合目のゲームではできるようになった。次の試合もしっかりと話し合いたい。

資料18 第6時の児童Aの振り返り

前半に負けた理由は、相手からのボールをダイレクトで返せてなかったし、ボールをつなぐときにミスが多かったからです。後半は場面に応じて、ボールを返すことができたので、勝つことができました。これからは体勢が悪いときには、無理してパスをしないようにしたいです。

ボール操作の技能が身に付いたことで、コートに広がってパスを受けている姿が見られた。「ゲームチェックシート」の振り返りには、すべての項目にA評価が付けられていた。さらに、児童Aの振り返り（資料19）には、「話し合ったこと……できるようになった」と記述されていた。これらのことから、課題練習や話し合いの場を設定し、「課題練習シート」や「ゲームチェックシート」などの教具を活用したことが、仲間と共に課題を解決することに有効であったと言える。

（4）「チームで協力して優勝を目指した児童A」

第8時、これまでに取り組んだ成果を発揮するバレーボール大会である。児童Aのチームは準決勝で負けてしまい、3位決定戦の作戦タイムでは児童Bが中心となり、攻撃や守備の仕方について具体的な指示を出しながら話し合っていた。その後の試合では、見事勝利し、児童Aのチームは3位で単元を終えた。児童Aの振り返り（資料20）には、「最後の大会のとき……なりました」と記述されていたことから、児童Aは、練習方法を工夫したことで、技能を身に付け、仲間と共に体を動かす楽しさを実感していることが分かる。また、「話し合ったことで……なりました」という記述から、話し合いの場を設定し、タブレット端末やゲームチェックシートを活用したことで自己やチームの課題を可視化しながら、より具体的な解決方法を考えることができた。

資料19 第7時の児童Aの振り返り

最初はパスも変な方向に飛んでいくし、相手コートに返すこともできなかったけど、話し合ったことでパスもいい感じのところまでできたと思うし（最初より）、相手コートに返すのもできるようになったと思います。

資料20 第8時の児童Aの振り返り

最初の授業のとき、思った方向に飛んでいかないと、全然3回でつなげないし、おもしろくないと思ったけど、最後の大会のときには、思った方向に飛ばせるし、3回もつなげられるようになりました。話し合ったことで、パスもいい高さに出せたり、体の向きも意識したりすることができるようになりました。

6 研究の成果

（1）仮説1について

手だて①：練習方法の工夫

児童の実態に応じたパターン練習を行ったことで、アンダーハンドパスの技能を用いたボール操作を身に付けることができた。また、技能ポイントを記載した資料を壁面に掲示したことで、児童Aは、いつでも確認しながら練習をすることができた。資料21は、児童Aと学級全体における「直上レシーブ」の記録の変化である。児童Aの第8時の回数は11回であり、第2時と比較して、6回多くなった。学級全体としても、第8時には第2時と比べて、記録が向上していることが分かる。このことから、練習方法を工夫することで、技能を身に付けることができたと言える。

資料21 「直上レシーブ」の記録の変化



（2）仮説2について

手だて①：課題練習の場の設定

子どもたち自身が課題と向き合い、解決に近づく練習方法を考え、課題を意識して練習に臨むことができた。第5時から第7時には、より効果的な練習方法を考えることができるよう「課題練習シート」を用意し、前時の課題を解決できるように練習に取り組んだ。児童Aは、仲間と話し合い、課題練習をしたことで、自己やチームの課題を解決することができた。このことから、課題練習の場を設定し、教具を活用することで、仲間と共に課題を解決することができたと言える。

手だて②：話し合いの場の設定

単元の中で、チームごとに課題を話し合ったり、作戦の共有をしたりする場を設けたことで、児童Aは、ゲームの内容と活動を振り返ることができた。また、タブレット端末で撮影をした様子や「ゲームチェックシート」を基に学習を振り返ることで、自己やチームの課題を可視化することができた。児童Aは、仲間と共に作戦を立てたり、解決方法を考えたりしながら練習やゲームに取り組むことができた。このことから、話し合いの場を設定し、教具を活用することで、仲間と共に課題を解決することができたと言える。

7 今後の課題

本実践の「バレーボール」では、アンダーハンドパスに特化して行った。そのため、顔の近くに来たボールは、後ろに下がったり、体を曲げたりしながら打っていたため、今後はオーバーハンドパスを取り入れた単元構想も考えていきたい。また、タブレット端末で撮影をした様子から課題を見つけるのに時間がかかってしまうため、より効果的な活用方法を検討していきたい。